

# 薬剤難治性パーキンソン病に対する MRガイド下集束超音波治療(MRgFUS)を実施

医療法人偕行会はこのほど、薬剤難治性パーキンソン病に対するMRガイド下集束超音波治療(MRgFUS = MR guided Focused Ultrasound)を名古屋共立病院(名古屋市中川区、堀浩院長)で開始した。今年9月1日に保険適用となつてからは国内初の取り組みとなり、同院では、10月末までに2例を実施した。

パーキンソン病は中脳の黒質ドーパミン神経細胞の減少に伴う進行性の神経変性疾患。振戦(ふるえ)、手足の筋肉のこわばり、無動などの運動症状を伴う。ドーパミンを薬で補う薬物治療が基本だが、患者によっては、長年の内服により身体の一部が無意識に動いてしまうジスキネジアや、強直するジストニアといった症状が出てくることもある。

その場合、従来は脳に凝固針を

刺して治療部位を熱で固める定位的高周波凝固術、または、脳内に電極を留置して持続的に刺激する脳深部刺激療法(Deep Brain Stimulation:DBS)が治療の選択肢となっていたが、穿頭手術を伴い、脳に凝固針あるいは電極を刺入する必要があるなど身体への負担が大きかった。

MRgFUSは、MRIと超音波装置を組み合わせた、メスを使わない低侵襲の治療法。ヘルメット型の集束超音波治療機器から発せられる1000本あまりの超音波を集束、MRIで位置と温度をガイドしながら、標的部位を55度前後に加熱し凝固する。治療効果をすぐに確認できるため、治療の安全性も高い。

脳内の視床または淡蒼球を標的とし、振戦、運動症状(DBS不適応例の場合)の緩和が期待でき



MRgFUSの実施状況

写真提供：インサイテックジャパン株式会社

MRgFUSを中部地区で初めて導入。治療の適応の可否、妥当性の評価などを名古屋大学脳神経外科と連携して行いながら、20年8月末までに、本態性振戦(意思と関係なく手、頭部、声などがふるえる疾患)に対して70例を実施してきた。

名古屋共立病院の名古屋放射線外科・集束超音波センターの津川隆彦センター長は、「これまでの外科的治療法と比較して、MRgFUSは身体に対する負担が少なく、細かい調節が可能であり、また穿頭を必要としないため髄液漏出に起因する脳の頭蓋内移動も少なく、より正確な治療が行えます」と説明する。これまで実施した2例では、振戦など症状の軽快を認めるなど、治療経過は良好だとい

る。平均的な治療時間は3〜4時間程度で、前日の治療準備などを含めて2泊3日の入院で可能だ。同院では2017年7月に、